自国内の政治に利用する「慰安婦」問題に惑わされるな

「国を守るため」私も兄も志願兵となった 今も生きる「日本精神」がある限り 日本は大丈夫だ

元台湾総統 李登輝
LEE Teng-hui

中韓によって歪曲された歴史が世界中に〝事実〟として流布されている。日本は毅然とそれらを否定するところから始めなくてはならない――太平洋戦争では日本帝国軍人として高射砲部隊に属し、兄は南方戦線で戦死した李登輝元台湾総統が太平洋戦争の真実を語る。

＊

日本と中韓の関係がこれまでになく悪化している。台湾と中韓ではこれほど日本に対する姿勢が異なるのはなぜか。

かつて戦争相手だった中国は別にして、日本は戦前から終戦まで台湾と韓国に対してよく似た統治政策をとってきたはずである。しかし、戦後のその評価は台湾と韓国では正反対であり、韓国は統治時代を民族の恥とし、いまだに恨みの念を抱き続けている。

一方の台湾はどうか。台湾が日本に統治されることになったのは、日本が日清戦争に勝利して清朝が台湾を割譲してからだ。その講和会議で李鴻章は伊藤博文に「3年おきに乱が起きるような土地だが、必要か?」というような言い方をしたとされている。当時の台湾は未開の地と呼んでも過言ではない状態だった。

欧米諸国は、似たようなアジアやアフリカの国々を植民地としたが、彼らの目的は「略奪」であり、現地の住民は搾り取る対象だった。ゆえに、現地住民の生活を向上させようとか、教育を普及させようといった発想はなく、まして植民地を近代化するなど思いも寄らなかった。

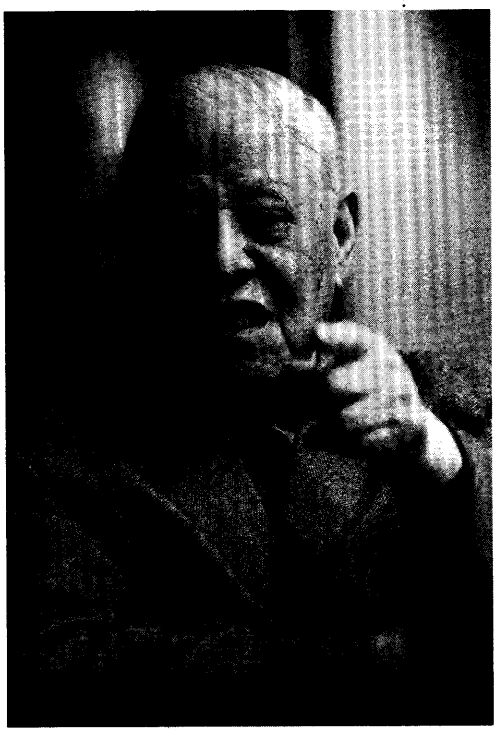
しかし、日本の統治政策は欧米の植民地支配とはまったく異なっていた。日本は〝主なしの移民の国〟だった台湾を50年かけて近代化した。特筆すべきは、統治政策の中心に据えられたのが「教育」と「農業」だったということだ。

1895年4月に台湾総督府を開庁したわずか3か月後の7月に、芝山巌に最初の国語学校（日本語学校）「芝山巌学堂」を開校したことがその証左と言える。現在では芝山巌は台湾教育発祥の地とされ、「六氏先生」の慰霊碑が建立されている。

六氏先生というのは、匪賊に襲われて殺された6人の日本人教師のことである。当時、この地は匪賊の暴動で治安が悪化していたため、住民は日本人教師らに避難を勧めた。しかし、彼らは「死して余栄あり、実に死に甲斐あり」と去らなかったために悲劇が起きた。文字通り、教育に命をかけた六氏先生の話は台湾ではよく知られ、慰霊碑にはいまも献花が絶えない。

台湾の農業改革で大きな貢献をした水利技術者の八田與一も、台湾で知らない人はいない。八田は干ばつが頻発していた台湾南部の嘉南平野を調査し、灌漑設備が不足していることを指摘。当時としては世界最大の規模となる大貯水池「烏山頭ダム」の建設事業を指揮した人である。

その後、フィリピンでの灌漑調査のために乗った船が米潜水艦に撃沈されて亡くなったが、八田の銅像と墓は烏山頭ダムの公園にある。銅像はダムの完成直後に作られたもので、蔣介石国民党による破



【PROFILE】1923年台湾生まれ。旧制台北高校、京都帝国大学農学部で学び、戦中は志願兵として高射砲部隊に配属された。終戦後、台湾大学に編入し卒業。台北市長、台湾省主席、副総統を経て88年総統に就任。96年台湾初の総統直接選挙で当選し、2000年まで務める。著書に『日台「心と心の絆」』（宝島社刊）ほか多数。

壊から逃れるため、地元住民らの手で50年間にわたって隠し守られ、1981年に再び元の場所に設置された。

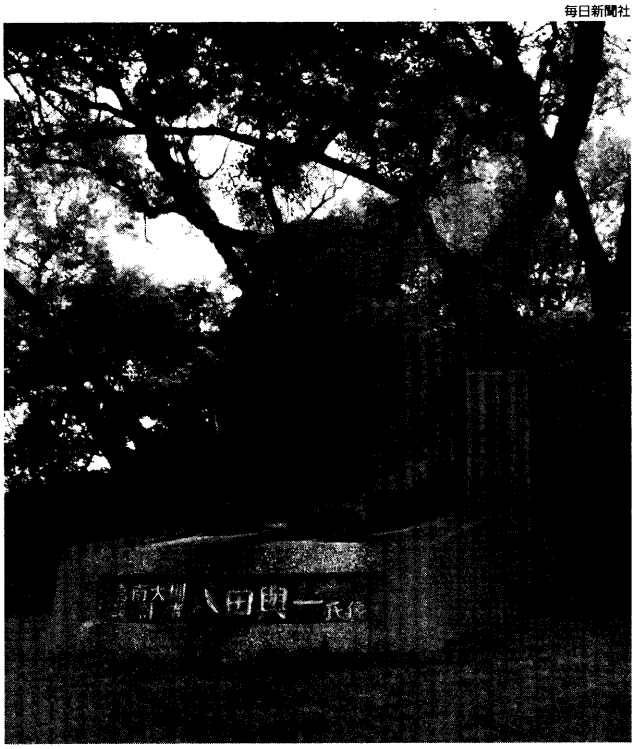
彼らに共通するのは、「日本精神」を体現した人物であるということだ。「日本精神（リップンチェンシン）」とは台湾人が好んで用いる言葉で、「勇気」「誠実」「勤勉」「奉公」「自己犠牲」「責任感」「遵法」「清潔」といった精神をさす。日本統治時代に台湾人が学び、ある意味、台湾で純粋培養された精神と言えるかもしれない。

実はこの言葉が台湾に広まったのは戦後で、国民党の指導者が自分たちが持ち合わせていない台湾人の気質をそう呼んだのが始まりだ。

教育によって台湾に浸透した日本精神があったからこそ、台湾は中国文化に呑み込まれず、戦後の近代社会を確立できたと考えられる。

私も兄も「日本人」として国を守ろうと戦った

台湾に日本精神がこれほど浸透したのは、台湾人を搾取する対象の植民地の人間としてではなく、原則的に同じ日本人として扱ったからである。



烏山頭ダムの湖畔には八田與一の功績を称える銅像がある。

毎日新聞社

だからこそ、日本と台湾を守る、「国を守る」という意識も生まれてくる。

私は、小・中・高校と正式な日本教育を受け、台北高校から京都帝国大学に入学してすぐに陸軍に志願入隊した。それは国を守りたいという気持ちからだが、実はそれ以外にも理由があった。

父親は警察官僚で転勤が非常に多かったため、子供の頃、私はなかなか友達ができず、内向的で我の強い子に育っていた。それを案じた母親から、「お前は情熱的だが頑固すぎる。もう少し理性的になりなさい」と諭され、自分の排他性に気づいた。それで自我を理性的にみつめるために、中学・高校時代に、鈴木大拙の『禅と日本文化』や西田幾多郎の『善の研究』、新渡戸稲造の『武士道』などを読み漁り、自然と日本の精神文化が自分のなかに浸透していった。

『葉隠』には「武士道といふは死ぬことと見つけたり」という一節がある。「死」をみつめることで、人はどう生きていくべきかを考えるのが日本の精神文化の真髄である。だから、歩兵として戦地をさまよえば、「生と死」の問題に真剣に向き合える。そう考えて陸軍に志願したのだ。

しかし、その私から見ても、私以上に日本精神の影響を色濃く受けたのが兄（李登欽）だった。兄は昔から少し変わっていて、私が近所の子と喧嘩していると、加勢するわけでもなく、あとから「なんで喧嘩なんかするんだ」と厳しく問い詰めた。その頃から日本人的だったように思う。

学校の教師をしていた兄は結婚して子供もいたが、教師をやめて警察学校に行き、みずから志願して台湾での第一回海軍志願兵となった。

兄の後を追うように軍に志願した私は、陸軍の高射砲隊に入り、高雄に配属された。兄は南方の戦地に行く前に高雄にやってきたので、休みの日に会って一緒に写真を撮ったが、とても寂しそうにしていたのを覚えている。どこに行くのかは軍事機密だから言えなかったのだろう。ただ「南へ行く」と言っていた。その後、日本軍がマニラから撤退するときにしんがりを務めて戦死したのを知った。寂しそうだったのは、死を予感していたからかもしれない。兄は2年間、兵隊として国を守り、24歳で散った。

兄が亡くなった後、実家にいた兄嫁の女中が、家の外で血まみれになった兄の姿を見たと言って騒ぎになった。そのとき私は日本にいたので話を聞いただけだったが、兄の霊と会えるのならと、実家に帰って1か月間待ち続けたが、残念ながら私が兄の姿を見ることはなかった。ひょっとしたら兄は家のことや妻子のことを心配していたのではないかと思っている。

私がこのことを上坂冬子さんに話して、彼女は著書『虎口の総統　李登輝とその妻』に書いて送ってくださったが、申し訳ないが読めなかった。泣いてしまうのがわかっているからだ。

日本の若い方はご存知ないかもしれないが、台湾には私や兄のような人間がたくさんいた。だから、靖国神社には志願兵、徴用兵合わせて2万8000柱もの台湾人の魂が祀られている。

台湾にいた朝鮮人売春婦はみずから戦地へ赴いた

ここで改めて日韓関係の問題に視線を戻そう。台湾が親日だからといって、同じよう

な統治政策をとった韓国でも親日であるべきだという考え方はすべきではない。

台湾と違って、韓国は曲がりなりにも一つの「国」であった。そのプライドを踏みにじったというのは事実として認識しなければならない。

ただその一方で、韓国や中国は、自国の宣伝工作の一環として捏造した「歴史」を利用する。その最たる例が「慰安婦」だ。

戦時中、台湾の東北地方には売春婦がたくさんいたが、その多くが朝鮮人女性だった。戦争が激化して兵士が南方に行ってしまうと、売春宿では閑古鳥が鳴き始めた。そこで彼女たちはグループを作り、軍隊がいる場所に集団で移動して行った。みずから望んで戦地に向かったわけで、強制などなかった。

韓国は常に強い国に寄り添って生き延びてきた国である。それは真横に中国という強大な国家があったからで、日清戦争、日露戦争で日本が中国、ロシアを破り、日本が強い国として彼らの目に映ったからこそ日韓併合を呑んだのだ。

そういう考え方を踏まえて、現在の日韓関係が悪化していることを見ると、彼らが「力のある国」と認めている国が変わったことがわかる。

朴槿恵大統領の父、朴正熙は日本の士官学校で教育を受けた人で、彼女も親日的かと思いきや、むしろ反日の姿勢を明確にして再び中国に寄り添おうとしている。今は日本よりも中国のほうが強いと彼らは考えているからだ。だから彼らは日本に対して罵詈雑言を投げかけ、中国に阿(おもね)っている。

中国も同様で、都市部と農村部で極限まで貧富の格差が広がって暴動が頻発している状況で、13億人とも18億人ともいわれる人民を束ねていくには仮想敵が必要となる。アヘン戦争まで遡ってイギリスを敵に据えても、話が古すぎて誰も感情移入できないから、より最近の日中戦争の敵にその役割を求めているだけだ。

日本は否定すべきは否定して、毅然と応じなくてはならない。

21世紀初頭、世界は米中の「G2の時代」に入ると言われていた。しかし、中国という国は南京大虐殺のようなホラ話を世界に広め、日本の尖閣諸島や南沙諸島や西沙諸島の領有を主張するなど、近隣諸国との間で軋轢を生み続ける有り様で、グローバルなリーダーたる資格などない。

私はむしろ、政治学者のイアン・ブレマー氏が、『「Gゼロ」後の世界』(日本経済新聞出版社刊)で予見したように、グローバルなリーダー不在の中で調停機能が失われ、アジアや中東で地政学的な対立が激化するGゼロの時代に突入すると見ている。

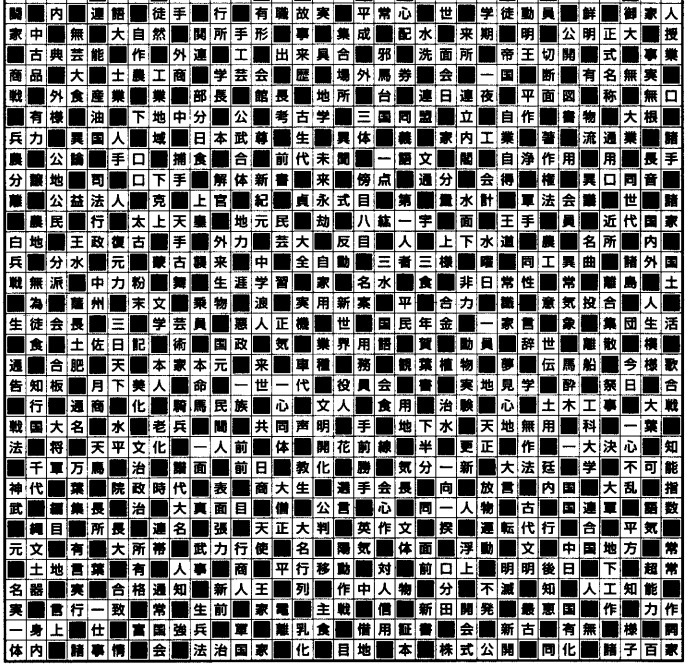
新たな世界で日本はどのように生き残っていくべきか。

私は東日本大震災の後、復興のために力を尽くしている若者たちに会い、彼らのなかに今も日本精神が息づいていることを感じ取った。日本人は世界のどこにもない優れた精神文化をもっていることに自信を持っていい。

問題は日本の指導者たちで、物事を大局的に捉え、国の進むべき方向を決められる政治家がいないことである。しかし、私は心配していない。日本の若者のなかから新たなリーダーが現われると信じている。

(全漢字ナンクロの答え)

世の中は諸行無常、正に平家物語の様

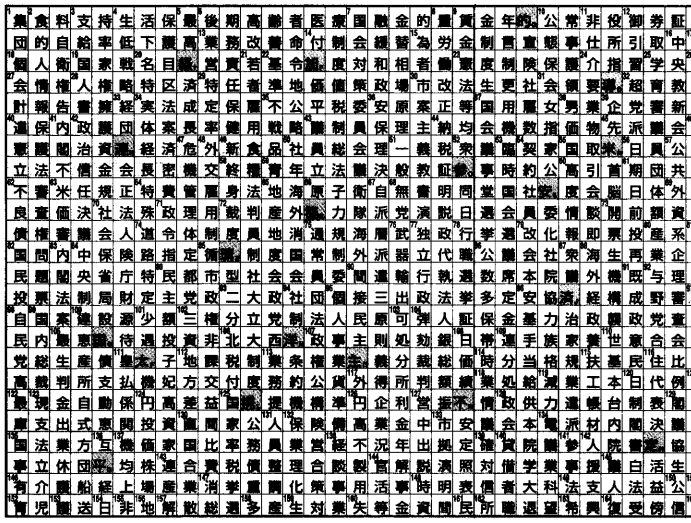


2014年1月号

「SAPIOからの挑戦状『全漢字ナンクロ』&『漢字オレ』」解答

(漢字オレの答え)

米国主導環太平洋経済連携協定参加的不安



*プレゼントの当選者は3月号(2月10日発売)で発表致します。